

原義とは異なる意味で使われる「誤用」例についての考察

A Study on the “Error” Examples Resulting Differences Meanings from the Original Meaning

中山 英晋
Eishin NAKAYAMA

Keywords : communication disorder, a change to “correct use”, dictionary as the norm, meaning changes to the opposite direction

キーワード：コミュニケーション障害、「正用」化、規範としての辞書、
対義的方向への意味変化

1 「誤用」とは

世間での日本語ブームは今も続いているようである。日本語の使い方を扱ったテレビ番組や新聞コラム、雑誌や書籍などはとどまることを知らないかのように、出現し続けている。その中で、ある日本語について「正しい」「正しくない」という視点で問題を切り取るのが非常に多い印象である。母語のことばに対して関心を持つように啓蒙するのは歓迎するが、切り口が似たり寄ったりの感がある。どうしてもことばの「正誤」だけが問題にされるのが最近の風潮ではないだろうか。たとえ「間違い」であったとしても、すでに幅広い世代や地域で使用されているのなら、そのことばはすでに存在しているものとみなして、存在理由を追求し明らかにするほうが大切であろう。もし、この現象の実態を追求する姿勢がなければ、物事の本質が明確にならないまま時間だけが過ぎ去る可能性も出てくる。しかしどうしても、そのような「間違い」表現が使用されるに至ったかが、十分に論じられないことのほうが多い。ことばは時代とともに変化し生成を続けていくのは定説であるが、一般的に言語変化は、当初は「誤用」や「ことばの乱れ」として異端扱いされ、是正するよう求められることが多い。歴史的には「正用」から分岐した「誤用」であっても、現在では広範囲や高頻度での使用が認められており、普及率が非常に高い表現も少なくない。これらは途上であるが、将来的に規範化することが容易に想像できる。普及率がそれほど高くなくても、ある程度の定着をみる「誤用」には、その存在に見合った背景や理由があるはずである。そのような背景や理由を考察することが、現代日本語に対する理解を深める。

まずは、「誤用」を扱ううえで、定義を確認しておきたい。

「ある一定の時期における、ある言語の文法規則からは生成できないような文構成、あるいは正しい慣用とか規範としては受け容れられない文構成をいう。」

(『ラールス言語学用語辞典』1980)

「語の要素を誤解し、語を間違った形で用いること。」 (『現代言語学辞典』1988)

「伝統的・規範的な用法とは異なる用法。」 (『日本語大事典』2014)

「本来の用法とは違った用い方をすること。まちがった用法。」 (『大辞林第二版』1990)

「あやまって用いること。用法をあやまること。」 (『広辞苑第六版』2008)

言語学辞典や百科事典、国語辞典などをあたったが、いずれの場合も、規範や慣用からずれている、間違っている、異なる、あやまるといったことばが並んでいる。文字から推察して、上記のような解釈になることは十分に納得できる。しかし「間違っている」からといって、その存在理由の検討をしなくてもいいというわけではない。成立してから現在までに、全く変化がなかった言語はおそらく一つもない。当初は「誤用」や「ことばの乱れ」として異端扱いされても、その蓄積により現在の姿となっているのであるから、どの言語も「誤りのかたまり」(田中1980)のようなものである。そして、現在規範とされているものも、ことばで形作られているのだから、「誤りのかたまり」を土台にして、規範が成立していることになる。規範に則って言語を正確に操ろうという発想は、すでに破綻していると言ってもいいだろう。また、なぜ「誤用」が生じるのかを根本的に見つめると、「誤用」を言語変化の一部とみなすのであれば、必要に応じて意味が転用した結果である、といえる。すなわち、変化せざるを得ない理由があるのである。完璧な体系をもった言語は存在しない、ということは何かしらの欠陥や不備があると考えていい。それらの治療や予防に役立ち、体系の穴を埋める働きを負っているとも考えられる。さらに、社会要因も忘れることができない。戦争直後など、時代に大きな変革があったときには、漢字制限や仮名遣いの新しい原則が導入されたり、一般の支持を受けた敬語の簡略化が行われたりなど、今までとは違った変化がもたらされ、「乱れ」を誘発する要因が作り出されてきたことも「誤用」出現の一つとして挙げられるだろう。このようなことから、「誤用」は求められて出現してきたものであり、出現させないよう抑え込むことは不可能である、といえる。

2 「誤用」を取り巻く環境

2.1 「誤用」の出現と拡散

「誤用」は言語変化の一部であり体系の穴を埋める働きを持つため、必ず出現するものであると前章で示したが、もう少し詳しく出現および拡散の過程を踏んでみたい。「誤用」に相当する意味がどのように発生するのかが明らかになれば、「正用」との関係を眺めながら、適切なコミュニケーションにより近づけるはずである。

2.1.1 出現のプロセス

まず、話し手の心的要因を考えたい。真田（2006）は、言語変化の動機として、経済性の原理と創造性の原理という二つの相反する方向の力があるとしている。経済性の原理とは、発音負担や記憶負担を軽減し、単純な規則に整える方向への変化であり、効率性重視の結果ともいえる。言語使用上の著しい不都合があったわけではないが、より負担の少ない簡略化した語形になるなどの効果がある。コロケーションで常に同じ動詞を伴う表現では、あえて動詞を連結せずとも十分に理解可能ということで、動詞部分が脱落することも考えられる。言語教育の分野においては、既有知識からの合理的な類推により学習言語の規則を単純化することが指摘されている（過剰般化や中間言語）が、決して適当に作り上げられたものではなく、必然性があるって生まれたものであろう。これも経済性の原理に基づいた「誤用」出現の要素である。一方、創造性の原理とは、使い古しの表現が新しい表現に駆逐されるような変化であり、新進性重視の結果ともいえる。既存の表現で十分間に合うはずであるが、表現効果などで新しさを求めたことによるものだろう。新鮮さを演出し、今までにないインパクトを創出したいのかもしれない。また以前との違いを鮮明にすることで、そのことばの使い手の積極的な姿勢も感じられる。例として、陣内（1990）は博多方言の語彙「しろしい」の意味・用法の変化は、上の世代とは違う独自性を積極的に示すという社会心理的かつ集団内的な要因により、起きていることを明らかにしている。またフレエ（1973）は、誤用分析において、「表現性の欲求」を分類の一つとして挙げ、「表現性の本質は、規範論理または規範文法が要求する意味上または形式上の規範をもてあそぶことにある」とし、「表現的であるがためには必ずしも正確である必要はなく、ただある印象を与えさえすれば」よく、「正用たることを要求しない」と論じている。「正用」かどうかを気にせず言語を駆使するということは、「誤用」出現の大きなきっかけとなることは明白である。

また、成長の陰にある「忘れる」行為も挙げたい。ことばには一つ一つ語源や由来のようなものがある。しかしそのようなものを逐一知らなくても、言語使用に関しては何の問題もない。もし知っていたとしても必要性を感じないために、忘れることは容認されている。その忘却や消失が、新しい物事ひいては発展を生み出す原動力となっていくのである。また、忘れるほどではなくても、かつての意味の理解が薄れることもある。そのことばの「正用」があらわす状況が少なくなり、なじみがなく、イメージできないなどが原因である。かつてはあったが、今はそのような場に赴くことがほとんどないということは、珍しくない。社会の変化により新しい概念が登場し、それを意味が去ったことばにあてがうことで、廃語化することを免れ、維持してきたことばもあるだろう。忘れるという行為は、我々の認知能力の一端であり、新しい意味、すなわち「誤用」を生み出すことにつながっている。

他にも、さまざまな「誤用」出現の可能性が考えられるが、コミュニケーションを考えるうえでの重要な要素である社会言語学的見解として、上記の二点を掲げておく。

2.1.2 拡散のプロセス

井上（1986）は「誤用」を言語変化の流れの一部とみなし、全体像を次のように位置づけている。

言いまちがい → 誤用・乱れ → ゆれ → 慣用 → 正用

それでも、これは万能ではなく、常にこのような過程を経るわけでもなく、また「誤用」はこの過程のみから出るわけでもないことを注釈している。ある表現に対して「誤用」と気づくころには、相当数の人に使われている。誤用出現を最初から見通すことは難しく、発見したときには、もはや説明がつけられないことも多いだろう。合理的な理由を付与しようにも、すぐにはできるとは限らない。その間も「誤用」拡散はとどまらない。ことばの使い手である大勢が決しているのか、想像以上のスピードで進行していく。それは、ことばに対する敏感な感性の持ち主の指摘を完全に置きざりにするかのようである。そして、気づくと「正用」のほうが少数派となり、「誤用」が間違っているとは思われなくなる。

また、田中（1983）は社会要因を問題にしている。この一連の流れが引き起こされるのは、関東大震災とその復興期の社会変動・人口移動によってさまざまな地域の方言的要素が東京に多く流入したことによる、と指摘している。地域の方言で使われていた話し言葉が東京地方に流入し、メディアに乗り大衆が知ることになる。これをもって、標準語化したといえる。そこから、書き言葉への侵入が始まる。その結果、今まで「正用」とされてきた意味や用法が、いつの間にか少数派となり、発信力は以前より落ちていく。その間に、もともとの「誤用」が勢力を拡大する。

「誤用」の出現は、新しい意味が付与されることに始まるのだが、新しいといっても完全に無関係の意味が付与されるのではなく、中心的な意味である命題はそのままというケースがほとんどである。「正用」から、意味の近接性による派生・転換であると考えるのが妥当だろう。ひとたび出現した新しい意味は、一般語化・意味の限定化・婉曲表現化などを施しながらメディアというルールに乗って、「誤用」として拡散していく。ルールに乗ると、登場頻度が高く目につきやすくなるため、話題にも上りやすい。その一方で、同じメディアが「正用」の存在を気づかせることによって、「誤用」に対する意識が増幅し、社会的な抑制力が働くこともある。日高（2009）は、「社会に流布する「誤用言説」が人々の誤用意識を増幅させ、言語使用を抑制する可能性を示している」としている。一連の言語変化の流れが停滞することを意味しているが、この意識により「誤用」防止の観点が働き、「誤用」使用を抑制しようとする動きになる。それでも、正しいものを知ったところで、慣れ親しんできた方法を捨て去るにはあまりにも勇気がある。何事においても、簡単に変えることができたらそんなに苦労はしない。結局、そのような指摘は日々の暮らしの中で埋没し、これまでどおり「誤用」を使い続けることになる。また、文脈からそのことばを判断するときも、話し手と聞き手のそれぞれが「正

用」「誤用」の両方の意味で解釈しているとも考えられる。どちらの意味で解釈しても、文脈上の問題はなく、そのことばが持つ本来の意味と思いながら、そのまま「誤用」の存在に気づかないこともあるだろう。人が接触し「誤用」を使うことを重ねれば、自然なコミュニケーションとして取り込まれ、加速度的に普及し「正用」化が進む。さらに辞書に掲載されることになれば、規範化し、正しいものとして認識され始める。規範に忠実な人ほど、「正用」化をいっそう後押しし、広がりとはどまることを知らなくなる。このように、ことばそのものに要因を見出す内発的要因と、社会との接点に要因を見出す外発的要因により、意味変化の一部として「誤用」は拡散を続け、「誤用」を脱していくのである。

2.2 「誤用」によるコミュニケーション障害

言語変化は、想像以上のスピードを誇っても、総合的にはそれほど急激に起きるものではなく静かに進み、ことばは新しい意味を獲得していく。極端な変化ではないため、「誤用」が出現しても、コミュニケーション上の障害は起きにくく、問題は軽微であろう。現実のコミュニケーションの中で「誤用」の実態を論じた記述を紹介したい。

人間の言語の重要な役割が意思の伝達、コミュニケーションだと考えると、「誤用」はそれほど大きな障害になっているわけではない。(中略) 大変な結果をもたらすことはほとんどない。人間の言語にはかなりの余剰性redundancyがあつて、たとえ一部分を間違えても、前後の文脈やその場の状況から補充・修正が可能なのが普通である。しかも、世間で二つ並び行われていることがよく知られているような「誤用」は、実質的な伝達には何の障害もひきおこさないといつてよい。もともと、意味が通じた上で、聞く人が「正用」に直すことができるからこそ「誤用」といわれるのである。

井上忠雄「誤用の社会言語学」(1983)

コミュニケーションは、言語の表面のみを追うことではなく、文脈や社会的状況からの判断がものをいう。そこでは総合的解釈こそが重要であつて、一部のみを見つめることは、逆に円滑なコミュニケーションから遠ざかってしまうことを意味している。確かに、一部がわからなかったり聞き取れなかったりしても、大部分がわかれば全体的な理解には支障をきたさず、障害とは感じないことも多い。実際に井上(1983)は、上記記述のあとに外国人や幼児への対応で、不完全な日本語を補いながらもコミュニケーションが成立しているさまを挙げている。「誤用」ということばそのものも、「正用」の対義語として一まとめであり、どちらか一方では成り立たないことを意味している。つまり、「誤用」だけという概念はなく「正用」があつて初めて存在が認められるのであり、その時点でしっかりと「正用」を意識できているのである。このようなことから「それほど大きな障害にはなっていない」「大変な結果をもたらすことはほとんどない」と論じているが、「それほど」や「ほとんど」が気になる。本

当に障害はないのだろうか。完全な自信がないため、このような記述をただけであろうか。実際は、言語の表面のみを追っていたら大したことはなくても、文脈や社会的状況を組み込むと、障害が引き起こされているのでは、といった現象は存在する。問題が軽微ではすまないような事例を以下に示したい。

- (1) 役不足の私ではありましたが、みなさまのご協力のお蔭で……。
- (2) 「おじさまは気のおけない人ね」とカワイコちゃんから言われたら、私は喜ぶ。ところがどっこい、これは「気が許せない」と言っているのだ。(中略) 大ショック……。
- (3) 打った瞬間に鳥肌が立ちました。大事な試合でしたからね。
- (4) 清潔にし、健康に保つための機能に、何が必要か必要でないか。クリニックのスキンケアシステムを開発した皮膚医学者は、この点を徹底的にこだわりました。
- (5) 「トンボをはら側からスケッチしました。スケッチとして最もてきとうなものの一つ選びなさい」の問いに、あり得ないものを選んでいるという。本人は「だって、一番てきとうなのはこれでしょ？ 本当のトンボの脚の付き方はこっち」と正解を指した、という話にも思わず笑ってしまった。
- (6) 福田康夫内閣総理大臣（当時）はオリンピック選手団に「せいぜい頑張ってください」と激励した。しかし選手を激励するにはふさわしくないという批判的な意見が寄せられた。
 - (1) ……国広（1991）、(2) ……見坊（1976）、(3) ……石山（1998）、
 - (4) ……山田（1996）、(5) ……新野（2011）、(6) ……向坂（2009）からの引用、下線は稿者による。

(1) は話し手が〈与えられた役目が重すぎる〉（「誤用」）という意図で謙遜する意味合いを出そうとしているところ、聞き手によっては〈与えられた役目が軽すぎる〉（「正用」）と解釈し、高慢な感じを与えてしまっている。(2) は話し手が〈油断できない〉（「誤用」）という意図で警戒感を伝える意味合いを出そうとしているところ、聞き手は〈遠慮がいらぬ〉（「正用」）と解釈し、心を許せる安心できる人という意味として受け取り、しばし有頂天である。(1) (2) は「誤用」として辞書などに記載された例からの事例である。

(3) は話し手が〈感激している〉（「誤用」）ことを伝えようとしているが、聞き手によっては〈驚いて怖がる〉（「正用」）ような出来事があったのか、と誤解してしまう。(4) は〈よくしようと追求する〉（「誤用」）べきポイントを力説しているのに、〈必要以上に気にする〉（「正用」）ことで大切なポイントはほかにあるかのような印象も与える。(3) (4) は意味の「誤用」ではなく、用法がプラスとマイナスで反対になっていることから引き起こされる事例である。

(5) は〈適切〉なものを選べ、という出題者の意図に反して、〈いい加減〉なものを選べ、

と理解してしまっている。(6)は〈精一杯〉頑張って、という激励を、〈大したことはできないだろうが〉頑張って、という否定的・侮辱的なニュアンスで判断され、批判的的となってしまう。(5)(6)は「誤用」ではなく、辞書等に掲載されている「正用」の範囲内だが、誤解が生じている事例である。

また、記事データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」で、最近の事例をあたったところ、以下のようなものも収集できた。

(7) ロケットや人工衛星は技術的には完成段階を迎え、民間でも宇宙ビジネスができるようになりました。ただ誤解してほしくないのは、宇宙開発を経験したことのない人や会社がやおら始めても、うまくいく時代になったわけではないということです。

「朝日新聞」全国版朝刊(2015.9.20)

(8) 抜群のテクニックと強打、スピードでぐいぐい引き込み、聞く者を圧倒した。テレビで若き女性ピアニスト、ユジャ・ワンのプロコフィエラを見て厶然とさせられたことがあるが、あの感覚に似ていた。ホールは拍手と歓声に包まれ、指笛がなり、聴衆は次々と立ち上がる。誰も帰らない。手を振る人も多かった。

「朝日新聞」福岡版朝刊(2014.5.13)

(9) 真にこわいのは失敗することではなく、いい加減にやって成功することだ。

「朝日新聞」岩手版朝刊(2015.10.17)

(7)は、〈急に、いきなり〉(「誤用」)の意味で使用しているのは明白で、〈ゆっくりと、おもむろに〉(「正用」)と解釈するには無理がある。これは(1)(2)と同様に、「誤用」としての指摘が高いものである。

(8)は、ピアニストのすばらしい演奏に対して、〈感動している〉(「誤用」)ことを伝えようという意図が見えるが、〈あきれて言葉が出ない〉(「正用」)ほどのひどい演奏であったのかとの誤解も生じかねない。(3)(4)のように、用法がプラスとマイナスで正反対になっているものである。

(9)は、〈どうでもいい〉ようにする、という意図だろうが、前後の文脈に依存できなければ、〈ちょうどいい〉ようにするとの解釈も成り立つのではないだろうか。(5)(6)と同じく、「正用」の範囲内にあって生じる誤解の例である。

「誤用」は時々メディアをにぎわしてはいるものの、通常は大して深刻な問題を引き起こすことはない。例外は、上記のようにコミュニケーション障害が生じる場合である。伝えるときに、自分の意図するところが誤解され、歪められるようなことがあっては、人間関係形成のうえで重大な障害となろう。言葉を選ぶ際、相手に対して失礼にならないかと気をつけるのも基本的なマナーである。

3 考察

3.1 社会言語学的見地から

語義変化というのは、何らかの文化的・社会的な変化を背景として、人間のものの見方や考え方が変わってくることによって起こる。つまり、それは人間の文化の歴史を反映しているわけである。一方、語義変化が起こるということは原義と転義との間に何らかの関連が認められるためであり、人間としての心理的な連想という点では時代や人種による違いをこえた一致が認められるはずである。

前田富祺「和語の意味変化」(1982)

これは、ことばの意味変化を社会との関係において捉えた記述である。タイトルでは「和語」限定だが、ことば全体に置き換えてもいい。コミュニケーションにおいて、問題が軽微ではすまない最たる例は、前章で取り上げたような対義的方向への変化であろう。前田(1982)は意味変化の分類を試み、内発的要因や外発的要因に由来する分類を行っているが、極端な例として対義語的な意味変化を、事例は多くないものの、分類の一つに挙げている。しかし、この現象について深い言及がないため、変化の理由やコミュニケーション上の障害など、これ以上の類推はできない。ほかに新野(1993)も、意味変化の型に対義的方向への変化があるとしている。「同じ共時態でほぼ正反対の意味で使われることになり、コミュニケーションにおいて相当の障害が生まれることが考えられる。にも関わらず、歴史的にその例が少なくないのは、その障害を乗り越えるだけの何らかの要因があったからのはずである。」と指摘しているが、「さまざまな要因を推察することはむずかしい」ため、対義的方向に至った変化が起きても、それほど障害が起きていないことが明らかになっていない。

前章でも取り上げた井上(1983)は、前後の文脈やその場の状況からの理解が可能で、「誤用」を「正用」に転換できるからこそ、「誤用」という語が存在する、としている。その上で、ある意味を「誤用」とみなすかどうかは「言葉の規範意識の有無が働いていると見られる。二つの単語・表現が対立した時に、一方を「誤用」とし他方を「正用」とするについては、その社会に規範意識が存在し、それが問題の現象に適用されることが条件になる。(中略)言語変化に付随する必然的なプロセスでもなく、使用頻度数や普及率といった数字だけで説明されるものでもない。社会の中での意識、評価が問題になる」としている。ある種の規範意識が「誤用」を誤用たらしめるのであり、「誤用」をしっかりと認識する上での基準となっている。しかし「正用」を使い続けても、多数派である「誤用」使用の厳然とした数字の前では力を失いやすい。そうこうしているうちに、世代交代が進み、「誤用」は「正用」化を遂げる。その過程で、コミュニケーション障害が一旦は起きるが、大きな問題にはならず、徐々に成りを潜めていくと考えられる。また実際は、会話中に相手の「誤用」を指摘・修正するのは難しく、それを行うと会話の内容面に興味がなかったかのようにも映り、相手の機嫌を損ねる恐れもあ

る。それこそ、コミュニケーション上の障害である。また、目上の人やある程度の年齢の人に、注意し修正を促すという行為も、社会上考えにくい。反対に若者が注意されたとしても、一過性のものであろうし、そもそも世代が違うからといって気にも留めないことも多い。核家族化や単身世帯の増加、地域コミュニティの希薄化やIT技術進展による職場環境でのコミュニケーション低下などにより、異世代での会話の頻度が、以前と比較して、少なくなってきていることも否めない。このように考えると、コミュニケーション障害が起きる前提が少なくなっているともいえる。

勢力を伸ばした「誤用」は、勢いそのままに「正用」を駆逐し、自らもスムーズに「正用」に移行していくようにも思えるが、逆の働きもある。「誤用」使用者に対して、単純に「誤用」を指摘したり修正したりするのは、一概にはできない。そこで使う方法は、誤用意識を芽生えさせることである。これにより社会的抑制力が働くこともある。メディアなどで「誤用」は「間違っている」と示すことで、違和感を前面に押し出す。すると、日本語として不自然であるという認識が徐々に頭上を覆い始める。では、どのような観点で誤用意識の増幅を促すのか。それは、時と場合により適切なことばづかいを使用するのは社会的に必要不可欠な能力である、ということである。「誤用」表現がいくら広まっても、「正用」として認められるには時間がかかる。実際に、規範の代表格である辞書への掲載はなかなか進まない。「ある程度多く使われているというだけでは辞書に載せません。まだ抵抗感を持つ人が多い間はダメ」であり、「文学作品の中に普通に現われ、同時代の人が疑わない言葉のレベルに達したと判断したとき」に辞書へ掲載されるという、辞書編者の意見（石山 1990）がある。間違っているかどうかの判定は、論理上おかしいからではなく、慣習に照らして適切ではないということだ。つまり、その場ではふさわしくないとみなされることばづかいがあるという意味で用いられている。高頻度で使用されているにもかかわらず、なお「誤用」として扱われるのは、言語表現自体が間違っているのではなく、特定の条件においてはふさわしくないという判定が社会について回るのが現状だからである。「誤用」の使用は、社会が求める評価的価値を低下させることに直結するとの認識があれば、おいそれと「誤用」を使い続けられなくなるだろう。評価的価値とは、教養や品性または育ちなどのことを言うが、これらを著しく欠いては、やはり成熟しているとはみなされないだろう。ことばづかいにより、社会的に成熟した大人であるか、それとも未熟な子供であるかを区別するポイントにもなっている。社会が大人に対して、適切なことばづかいを求めている以上、社会人たる者はその場にふさわしいことばを駆使しなければならない。このような意識は、メディアや学校教育、就職活動などの社会経験を通して継起され、「誤用」を自覚するようになることで、「誤用」の使用にブレーキをかけていると予想される。また「正用」か「誤用」かの判断に自信が持てないことばについても、使用を避ける傾向があるものと思われる。パソコンでの書類作成で漢字の使用が想定されるときでも、漢字の誤りを警戒するために、かな書きを多用するということがあるだろう。「誤用」を強く意識すれば、同時にその分だけ「正用」が想起される。それがコミュニケーションを阻害せずに、正

しく進行させることに大きく寄与しているのではないだろうか。新野（1993）は、「役不足」の「誤用」義が辞書に掲載されない理由を「単に誤解を生じるのみならず、相手に対し失礼千萬な言い草となってしまうため、（中略）反発、抵抗は抜きがたいものがある」という見解を示している。また「気が（の）置けない」については、「誤用」と断ったうえで辞書に意味が掲載され始め、一般向けの書籍や雑誌で取り上げられることも多くなった結果、「正用」が復活する兆しが見えることを収集した事例とともに紹介している。これはまさに、誤用に対する認識を形成し浸透させることが、「誤用」の使用を抑制する好例ではないだろうか。対義的方向への意味変化を例に挙げたが、このタイプでコミュニケーション障害が生じなければ、他のタイプでも生じないと考えることができる。

3.2 話し言葉・書き言葉と「誤用」の関係

日本語には、話し言葉と書き言葉の大きな遊離が認められるが、この点からも「誤用」出現とコミュニケーション障害を回避している現象を読み解くことができる。

話し言葉は書き言葉に比べて、人の基本的能力を用いたスタンダードな言語であることは疑いようがない。その分、融通性に富むため、一定の状態に落ち着くことは少なく、変化のスピードが速い。対して書き言葉は、文字として目に見える形で残るため、保守的な形態のまま、変化に対応しづらい。裏を返すと、論理的に推敲を重ねた正式なものとして扱われ、変化を好まない傾向があったということであろう。正式なものを構成することばは「正用」であるのが前提で、「誤用」の存在はない。そこで変化を続ける、つまり「誤用」を生産し続ける話し言葉は、スタンダードにもかかわらず、異端視されるようにもなる。このように、日本語での言語意識は書き言葉に支配されていたが、徐々に異なる傾向が表れてきている。巨大メディアであるテレビの登場以降、テレビを構成する話し言葉も主流になりつつある。東京地方を中心とする言葉が電波に乗り、あらゆる地方に急速に波及していくことで、話し言葉優先の社会が形成されようとしている。話し言葉は、規範を脱したり省略が多用されたりなどの特徴を持つが、話題の連続性により文脈把握はたやすく行うことができる。高コンテキスト言語である日本語であるが、話し言葉はさらに文脈依存を強めている。話し言葉を優先的に高頻度で使用することは、それだけ「誤用」として出現した新しい意味をまとったことばを使用することであり、また「誤用」の普及率を高めて「正用」に近づく貢献をしていることを意味している。話し言葉と書き言葉の関係が離れれば離れるほど、基準が二重に存在することになり、話し言葉で生産された新しい意味を「誤用」視する勢力が多く、コミュニケーション上の障害が生じることにつながる。しかし、話し言葉優先社会が進行することで、障害が生じにくくなっているのではないだろうか。実際に起きていることとして、外山（1990）は「耳で聞いてわかりやすい新しいことばが生まれつつあることを指摘できる。これが、カタカナ語でも、漢語でもない、ひらがな語であるのが注目される」と指摘している。「ひらがな語」とは和語と理解していいだろう。和語が日本語の主流をなしていたころは、創造性の原理によりカタカナ語や漢

語でインパクトを創出していたが、今度は揺り戻しの動きから、むしろ和語のほうが印象に残るようになってきているのではないか。確かに和語はわかりやすい。話し言葉の根幹を成す存在であり、言語意識の中心に位置している。その和語を多用することにより、カタカナ語や漢語との調和が進んでいる。外山（1990）は、平安朝の女流文学を「外来の漢字漢文学と在来の大和言葉の調和から生まれたものであった」ことを想起しているが、それが新しい文化の創造につながった、としている。今までの素材を統合し、単独では成し得なかったことができるようになる発展性がうかがえる。「誤用」により阻害されていたコミュニケーションを正常化しようとする機能が働いているのだろう。「誤用」は文化的創造において必須の現象である、とは言いすぎであろうか。

3.3 まとめ

ここまで、「誤用」がどのような存在で、言語体系のどのような部分に関わっているのか、そして、コミュニケーションにおいて障害は起きないだろうかといったことを論じてきた。

1章では、辞書記述を参考に、「誤用」とは何かを見た。「間違っただけ」存在という解釈であるが、言語体系の穴を埋める働きを持ち、求められて出現することを述べた。

2章では、出現と拡散の要因を追った。言語使用上の効率性を重視する経済性の原理と、新しい表現効果を求めた新進性を重視する創造性の原理に基づく心的要因において、「誤用」は出現する。また、物事が成長するのに不可欠な要素である忘却も作用しており、ことばの語源や由来を忘れることによって、新たな意味を獲得することを補佐する役割を負っていることを説明した。出現した「誤用」は、言語変化の流れに乗り、想像以上のスピードで進行していく。中には、社会変動や人口移動で東京地方に流入した各地のことばが標準語化し、「正用」を駆逐するほどに成長するものもある。一方、「誤用」意識の増幅により「誤用」使用を抑制しようとする動きもある。それでも誤用使用の広がりを抑え込むには至らず、他者との接触が活発になるにつれ加速度的に普及していき、ついには「誤用」を脱し、「正用」化を遂げるものまで現われる。とは言っても、極端な意味変化ではないため、コミュニケーション上の問題は起きにくいと考えられるが、問題が軽微ではすまないことが起こり得ることを提示した。

3章では、「誤用」によるコミュニケーション障害の回避について考察した。まず、ことばは社会との関係により捉えられるべきであるという論点で展開した。対義的方向への変化という極端な例も少なからず存在するが、「誤用」拡散の過程で一旦は障害が起きるものの、徐々に正常化への道をたどる。また適切なことばの使用こそが成熟した大人の証であるという意識により、「誤用」を知っていても使用することにはブレーキをかけることにつながる。「誤用」に対する意識を広めることが、正常なコミュニケーションに寄与している。次に話し言葉・書き言葉との関係を見た。書き言葉が保守的で変化に対応しづら一方で、話し言葉は融通性に富み変化のスピードが速い。書き言葉が正式なものとして扱われる中では、話し言葉は新しい意味である「誤用」を生産し続けるということで、異端のレッテルを貼られてきた。しかし話

し言葉を多用するメディアの出現により、話し言葉が主流となりつつある状況に変わってきている。話し言葉によるコミュニケーションは文脈把握をたやすく行うことができるため、たとえ「誤用」であっても、しっかりと文脈に沿うことができ、障害は起きにくい。話し言葉の中心に位置する和語を印象づける効果で使用する行為も認められ、カタカナ語や漢語との調和・統合により、文化的創造も垣間見える。これは、阻害されていたコミュニケーションの正常化につながる動きであると結論づけた。

4 おわりに

言語は世界を切り分けており、日常的な思考や知性の形成に大きな役割を果たすということは、しばしば言われていることである。確かに、ことばの概念が知覚に影響を及ぼすことはある。しかし、何事も方向性が一つというのは考えにくく、言語と思考においても相互に影響し合っているのではないだろうか。本稿では、原義から新しい意味を派生させ、「正用」に移行することで、原義を過去のものとして捨て去る過程をみてきた。また、話し言葉が書き言葉を侵食し主流になることで、意味変化のスピードが速まることも併せて観察した。これらの要素が「誤用」使用のコミュニケーション障害を抑え、円滑なコミュニケーションを形成している。円滑に実行しようという思考が新しい言語活動を創造したともいえる。

以上を考察したが、検証作業が十分ではない。今後は検証を進めながら、コミュニケーション障害が抑えられている様子を明らかにしたい。特に、極端な意味変化のタイプである対義的方向への変化を遂げたことばに対して、さらなる注目をしていきたい。

【参考文献】

- アンリ・フレエ 小林英夫訳 (1973) 『誤用の文法』 みすず書房 p168、pp201-204
 石山茂利夫 (1990) 『日本語矯めつ眇めつ』 徳間書店 p77、p106
 石山茂利夫 (1998) 『今様こくご辞書』 読売新聞社 p21、p177
 井上史雄 (1983) 「誤用の社会言語学」 『月刊言語』 12(3) 大修館書店 pp62-71
 井上史雄 (1986) 「言葉の乱れの社会言語学」 『日本語学』 5 明治書院 pp40-54
 国広哲弥 (1991) 『日本語誤用・慣用小辞典』 pp159-161
 見坊豪紀 (1976) 『ことばの海をゆく』 朝日新聞社 p21
 真田信治編 (2006) 『社会言語学の展望』 くろしお出版 p148
 陣内正敬 (1990) 「語の意味・用法のゆれと意味変化 —博多方言「しろしい」の場合—」 『国語学』 160 日本語学会 pp123-115
 外山滋比古 (1990) 「日本語は乱れているか」 『新聞研究』 467 日本新聞協会 pp10-14
 田中章夫 (1983) 『東京語—その成立と展開』 明治書院 pp307-308
 田中克彦 (1980) 『ことばの差別』 農山漁村文化協会 p50
 新野直哉 (1993) 「役不足の「誤用」について」 『国語学』 175 日本語学会 pp26-38
 新野直哉 (2011) 『現代日本語における進行中の変化の研究』 ひつじ書房 p352

- 日高水穂（2009）「言語変化を抑制する誤用意識」『日本語学』28（9）明治書院 pp14-26
前田富祺（1982）「和語の意味変化」『講座日本語学4 語彙史』明治書院 pp28-47
向坂卓也（2009）「副詞「せいぜい」の用法変化」『言語コミュニケーション文化』7（1）
関西学院大学大学院コミュニケーション文化学会 pp129-143
山田史雄（1996）『私の語誌2 私のこだわり』三省堂 p252

（平成27年11月4日受理）